

『屋根をよく葺いてある家には雨の洩れ入ることが無いように、心をよく修養してあるならば、情欲の侵入することが無い。』

お釈迦様の時代を思わせる、原始仏典の法句経の一節です。ここでいう屋根とは、おそらく萱葺屋根のようなものを想像してよいのでしょう。

今では少なくなりましたが、関東近郊では茨城県の筑波山麓、八郷地区や、福島県の会津地方に萱葺屋根は多く残っています。山里の風景に溶け込むその姿から日本独特とされている方もおられるでしょうが、実は意外にもアジアばかりか、西ヨーロッパのオランダ・ドイツ・デンマークにも多く見られ、特に標高が低く湿地の多いオランダでは煉瓦の壁と合わせる建築が一般的です。

さて、萱葺きの中でも長持ちするヨシ葺きでもおよそ二十年といわれますが、葺いてから年数が経つと屋根は傷んでいきます。そこを法句経では、たゆまぬ仏道修行をせよという意味で喩えているのでしょう。

いつの間にか屋根が傷んでくると、萱の束を押し支えている押鉾という竹が露出していきます。これが目印になるのですが放っておくと、カラスがヨシを抜いて穴を開け、そこにムササビが住み着いて穴を大きくしてトンネル状に掘り進めます。そこから雨水がしみて雨漏りするようになります。そのうちにハクビシンが通って屋根裏に侵入し、あちこちを齧って穴を開けます。さらに崩壊が進むとてっぺんのぐしが傾きます。そうして屋根が崩れてしまいます。そうならないように、外から時々屋根を点検して早めに補修するのです。

こういったことを、人の心の有り様に分かり易く当てはめたところは、お釈迦様の目の付けどころの妙といえるでしょう。迷いの道に走らぬように、覺りを求める心をいつもしっかりと確かなものにせよという戒めと受け止めましょう。

しかし、傷んだ目印や修理の目安がある屋根と違って、人の心の歪みや弛みは外からは見えにくいものでしょう。まして自分自身では尚更気付かないものです。そ

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

ここで、修行道場では布薩^{ふさつ}といって、半月毎に仏様の名前を唱え、礼拝をし、自らの行いを反省する儀式を行い、心の点検をし、修行生活に活かしてゆくのです。一般の皆さんであればお盆やお彼岸といった、ご先祖様に因んだ節目が自らの心を見つめる役割の一つを果たしていると言ってもいいかも知れません。

もうすぐお盆の季節を迎えます。あなたの心の中に、雨漏りはしていませんか。

— 終 —